

第8日

令和7年3月6日（木）

午前10時50分再開

○議長（小島清人君） 休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、12番中島秀樹議員の質問を許可します。12番中島秀樹議員。

（12番中島秀樹君登壇）

○12番（中島秀樹君） 皆様、こんにちは。質問の許可を頂きました、12番議員中島秀樹でございます。今日は久しぶりに傍聴の方が来ていただいております、大変光栄です。いつも誰もいない席で話していることが多いものですから、本当にありがとうございます。私、最後から2番目になります。何を話そうかなあといろいろ考えてなんですけども、まずベタですが、今月で退職をされる職員の皆様、大変お疲れさまでした。本当にありがとうございました。役職定年というのもありますけれども、これからの人生、有意義に過ごしていただいて、朝倉市のために御尽力いただきたいと思っております。

これに関連したことを話そうと思います。私、テレビはあんまり見ませんで、ユーチューブばかり見えています。英語系のユーチューバーのShojiさんという方がいらっしゃるんですけども、その方のユーチューブの中で語られたことを言います。サラリーマンの皆様は、例えばあなたは建設課へ行きなさいって言ったら、建設課へ行って、保険年金課に行けば、保険年金課に行けと言われてたらく。私もそうでした。どこどこ支店に行きなさいと言ったら、その支店に行って、その支店で、あなた今回融資係ねと言われてたら、はい分かりましたって行って、融資係をいたします。

自分で人生を決めているのかって言ったら、仕事中はそんなに決めていないと思うんですね。ですけれども、退職をした後は、自分の人生は自分で決めないといけません。今日何をしたいのか、今日どこに行くのか、それは誰も決めてくれません。自分が決めないといけません。働いている時間を1日8時間働いていて、週5日働く。そしてそれが48週あるとしたら、48週働くとします。それが1年間の働く量。そしてそれを、20歳から60歳までの40年間働いたとします。8時間で週5日働いて、48週それがあって、40年間。それを掛けると、7万6,800時間になります。

これから退職する皆様は、仮に1日12時間自由な時間があつたとしたら、12時間の365日、そして60歳から80歳まで元気だとしたら、8万7,600時間、働いている時間は7万6,800時間、働いている時間よりも明らかに多い時間があります。大概のことは私できると思っています。

これもベタな話ですけれども、今、歴史が朝倉市議会でも盛り上がっていますので、伊能忠敬の話をしたいと思っております。伊能忠敬は江戸時代の商人で、50歳で隠居をいたしました。そして、6年かけて天文学と測量学を学びます。そして幕府の命を受けて、56歳から日本中を歩き、17年間で全日本地図を作ります。この全日本地図、伊能図と言われている

そうですが、これは今までなかったものです。伊能忠敬の地図は、精度が0.2%ぐらいの——誤差がないと言われております。そして伊能忠敬は、1日40キロ歩いて、約4万キロ歩いたそうです。この4万キロというのは、地球1周分に相当するそうです。

伊能忠敬は、56歳から日本中を歩きました。江戸時代の人ですから、そのときの平均寿命って分からないと思うんですけども、多分50歳ぐらいじゃないかなと思っております。それが56歳からして歩くわけですから、今でいう75歳とか80歳ぐらいから歩いたのかなと思っております。伊能忠敬は実際73歳で死んだんですけども、そういった経歴を持っている方です。よく私も60歳過ぎたんですけども、第二の人生って言われると思うんですけども、第二の人生って、前半の人生にくっついておまけの人生みたいなイメージがあると思うんですけども、伊能忠敬を見ていると、新しい2つ目の人生を歩んでいるのではないかなと、私は感じます。

年齢を理由に何かを諦めるには、人生は長すぎます。退職する皆さん、何か新しいことをまたチャレンジしてください。私もそうします。

以下、質問席より質問させていただきます。

(12番中島秀樹君降壇)

○議長（小島清人君） 12番中島秀樹議員。

○12番（中島秀樹君） では通告に従い、質問させていただきます。2項目挙げておりました、お決まりの朝倉市が発展するためには何をしたらいいのかと、市長施政方針について、2つを挙げております。今回は3月議会ですので、市長施政方針についてを先に質問させていただいて、順番に質問させていただいて、最後に時間があれば、子育て世代にとって魅力あるまちかということを質問させていただきたいと思っておりますので、どうぞそれでお願いたします。

まず昨日の夜、この施政方針演説をまた改めて読ませていただきました。これって、どういうふうにできているんだろうって思いました。市長が1人で考えて書いているのかなとか、いやいや市長はそんな時間ないよね、副市長がきっと1人で書いているんだろうと、私そんなことも思いましたけど、どういった形でこれ、できているんでしょうか。お尋ねいたします。

○議長（小島清人君） 副市長。

○副市長（佐々木哲治君） 施政方針ですが、中身につきましては、全般的には最初のほうに世界の動向、そして日本の動向、その後に総合計画に基づきます市の動向、市のやっっていく事業という、大体大きな柱3つで構成していると思っています。その中に市長の思いとか、そういったものを含めながら、約8ページから9ページになって、毎年なっていると思いますが、そういったもので作らせていただいております。

これにつきましては、やはり令和7年度、今回であれば令和7年度にどういった事業をやるかということになりますと、やはり主人公は予算になるのかなと思っています。予算

につきましては、春から夏にかけて、ある程度のいろんなことを、大きな柱を作りながらやっていくわけですが、例えば今年度であれば、やはり市制20周年記念事業といった1つの大きな括りがありました。これにつきましては、春先からずっと総合政策課に動いていただいて、全庁的に取り組んでいったと。あと戦後80周年記念の事業につきましても、同じように動いていただいたということです。

ここ2年ぐらいにつきましては、子育てや地方創生の戦略会議、こちらのほうで揉まれた部分につきましても、秋をめどにいろんな事業を持ち込んでもらっているというような作り込みでありまして、それを元に今度予算編成方針、予算編成になってまいります。おおむねそういった予算の状況、事業を見ながら、最終的には執行部で作っていくという形になろうかと思っています。以上です。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） だから施政方針は、予算編成方針と一緒にセットで出てくるんだなというのは、よく分かりました。そうすると、これって、まずこういうふうにしよという大きなグランドデザインがあって、それを下に下ろしていく指示型といいますか、そういった形なんでしょうか。それとも、各課の要望を挙げて、積み上げていくようなボトムアップ型、どちらになるんでしょうか。

○議長（小島清人君） 副市長。

○副市長（佐々木哲治君） 私は、今はボトムアップ型だと思っております。先ほど申しましたように、ここ2年ぐらいは、先ほど言いました戦略会議を設けて、そちらのほうから研究調査をしていただいた結果、いろんな事業を作り込んでもらっているというのがありますし、特に先ほど言いましたように、令和7年度は様々な事業があって、プラスアルファとして20周年、戦後80年というような記念式典の事業等が絡んできたということでございます。

しかしながら、やはりここ近年におきましては地方創生、そこに力を入れていくというのは当然のことですので、そこに重きを置いているといった方向で動いているというところでございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） ありがとうございます。ボトムアップ型ということですので、担当課がこういうのをやりたいということで、そういった思いが積み上がっているものだというふうに感じております。そして担当課は、ここに挙がっている分につきましては、少なくともよく理解しているというふうに考えておりますので、普通でしたら市長施政方針ですので、トップダウンで、例えば市長とのやり取りをすとかいうような、論戦を交わすとかいうようなことを、私はイメージをしておりました。でもやはりグランドデザインというのは私大事だと思っておりますので、ところどころで三浦部長、梅田総務部長、副市長、市長にはお尋ねしたいと思っておりますので、どうぞ適宜お答えいただきたいというふう

に考えております。

では、1つ目をお尋ねいたします。「市民と創る朝倉」をどう実現するのかということで、1ページ目に、市民の皆様に「市民と創る朝倉」のさらなる深まりを感じていただけるよう、気を引き締め、市政運営に一層精進してまいり所存でありますと書いています。私は、「市民と創る朝倉」というのは大事だなというふうに思っております。

その中で、来年市制20周年という節目を迎えるんですが、私は20年たったけれども、朝倉市としての一体感は醸成されているんだろうかということをお心配しております。だから「市民と創る朝倉」、これが大事だというふうに考えております。一体感とは、集団の一員であることを実感し、共通の目的や価値観を共有しながら、互いに協力し合う感覚のこと。集団の一員であることを実感し、共通の目的や価値観を共有しながら、互いに協力し合う感覚のことです、とあります。簡単に言えば、自分はこのチームの一員だ、朝倉市の一員だ、みんなで一緒に頑張っているという気持ちが生まれる状態だと思っております。

そして、私なりに昨日の夜調べましたら、一体感の要素として、共通の目的やビジョン、1番目ですね、2番目、信頼関係、3番目、協力・助け合い、4番目、心理的安全性、これは心理的安全性というのは、自由に意見を言ったり、行動したりできる環境のことを心理的安全性と言います。5番目、成功や喜びの共有、こういったものが一体感の要素だと言われております。逆に、一体感がないと、不満が生まれやすくなります。一体感があればモチベーションが上がって、チームのパフォーマンスも上がると、これは誰でも分かることだと思いますけれども、一体感がないと不満が募ると、私はそういうふうに考えております。

そういった中でお尋ねしたいのが、私はこの、まず一体感を醸成するために、共通の目的やビジョンなどを共有することが大事だというふうに思っておりますので、難しいと思うんですが、市長が外向いていって、市民の話を聞く機会が必要だと思っております。これについて、執行部としていかがお考えになりますでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） 市民の方の御意見を聴取する、その大事なことは、先日、昨日の議会議員の質問からもあったというように、説明したとおりでございますが、特に市長が直接市民の生の声を聞くこと、このことは十分理解しております。各種の会議・会合、また行事の際には意識をして市民の意見を聞き、行政内部におきましても、市長は各課の職員の生の声、そちらのほうも大切にしてくれています。そういうふうに、積極的に耳を傾けていただいているというふうに、私たち職員は感じております。以上です。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 市長から怒られるかもしれませんが、土日の行事がたくさんあって、東京にも出張をされていて、行政課題は山積み、そういった中で、なおかつ市民との対話をして、多分いろんな要望とかお叱りの言葉とか、こういったのが出ると思い

ます。私はいつ休んだらいいんですかと、多分逆に質問を受けるくらいな、そんなスケジュールで市長は動いてあるというのは、重々承知しています。

だけれども市長、市民と直接対話するというのは、これからの時代、大事じゃないのかなど。そして市長がそういう姿勢を見せることによって、20周年来たんだなど、朝倉市って変わっていくんだなって、そういったことができるんじゃないかなと思いますが、林市長、お忙しいとは思いますが、どんなふうにお考えでしょうか。お尋ねいたします。

○議長（小島清人君） 市長。

○市長（林 裕二君） 昨日もちよつと答弁申し上げました。その答弁の中では、総務部長が中心にお答えをして、いろんな制度に則ったことで、市民の意見を吸収しようというようなことと、私が申し上げましたのは、いろんな会合がありますし、挨拶する場も非常に多いと。そういう中で、市が特に力を入れてやっっていこうとすること等をお話させていただきながら、理解を求めていくということと、当然、挨拶だけではございませんので、その後いろんな意見交換の場があったりしますので、そういったときには、努めて声をかけられることが多いですから、それに対してできるだけ丁寧に対応してという中で、対応しているというのが基本かというふうに思います。

市民の声をしっかり聞く、受け止めるということは極めて大事であるということであるのは、議員がおっしゃったとおりということでもありますので、庁内においては職員もたくさんおりますし、場所もいっぱい違いますから、物凄く細かくできているというふうには思っておりませんが、特に若い職員とか——幹部職員は定例的な会議とかがありますので、いろいろ意見交換も当然するということになりますけれども、若い職員ですね、そういったことに対してはしっかり聞くということと。

これは前市長時代から行われておりました、こんにちは市長室ということがありますので、各支所ですね、朝倉支所、それから杷木支所、それから杷木支所には男女共同参画センターもございます。それから朝倉支所には人権センターもあります。そういったところにできるだけ足を運んで、そして課題を聞いたり、それに対して私の考え方を言ったりと、そういうことでやっております。

本当に私が欲しいのは、昨日質問を頂きましたけれども、フリーでトーキングできるような、そういった機会というのが非常に欲しいなというふうに、庁内で思っています。市民の声を聞くということに関しましては、いろんな形で、これから先も検討しながらやっっていこうかと思えます。ただ、議員が言われますように、もうやっぱり要望とか苦情とか、これしよっちゅう聞かされます。これは聞くのも仕事かなと割り切っていますけれども、あんまり生産的なことはどうかなと疑問を持ちながら、家路につくということもあると、これが実態かというふうに思います。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 市長がおっしゃるように、非常にストレスがかかることなのかな

と。ただ市長の言葉にありましたように、こんにちは市長室みたいな、そういった市民のほうに出向いていただいて、話を聞いてあげる。私、市長から話を聞いてもらったとか、市長が出向いてきたって言ったら、多分市民の皆さんは足が震えるぐらいうれしいんじゃないかなと思います。そして中には罵詈雑言を浴びせる方もいらっしゃると思います。でもそれをずっと繰り返していると、市長、あんたも大変やなど、そういうステージが来るんじゃないかなと思っておりますので、なかなか生産的なものはないかもしれませんが、私はそれをできたらやっていただきたいと思います。

お忙しいと思いますし、非常にへこむと言いますか、大変なことだと思いますけれども、朝倉市の一体感を醸成するためには、ぜひともトップである市長がやっていただきたいと思います。

○議長（小島清人君） 市長。

○市長（林 裕二君） 非常に悔やみ事を、悔やみ事じゃないや、それは言いましたけど、実態はこうですよ。私の気持ちは積極的ですから、議員が今言っておられることには、当然応えていくということで、御理解を頂きたいと思います。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 市長が積極的というのはよく分かりました。私たちも議会報告会というのを年に1回やらせていただいていますけれども、やはりそれに臨むにあたって、今回はどういうお叱りを受けるんだろうとか、やはりなかなか足が向かないときなんかもあるんですけども、しかしそれを乗り越えていくと、きっと生産的なものがあると思いますので、ぜひ市長、そのお気持ちを、すみません、私、誤解しておりましたので、保っていただいて、続けていただきたいと思いますというふうに思っております。

すみません。そういった中で、やはり共通のビジョンとか目的っていうのは、私は朝倉市の一体感を醸成するとか、それから「市民と創る朝倉」っていうのは大事だと思うんですよね。これって施政方針といいますか、そういったものには書いてないんですけども、でも今度20周年を迎えるにあたって、それは必要だと私は思っているんですが、朝倉市が20周年を迎えるにあたって、市民と共有するビジョンや目的って何なんでしょうか。お尋ねいたします。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） 議員が申されました一体感、それについて、1つの事業としてではないですが、私が職員として感じたことは、災害復旧は非常に一体感が持ててやれたことだというふうに思います。そのことによって、朝倉市民は共通の目的、それはやっぱり災害復旧であるとか、復興であるとか、そういうのが自然となされてきたというふうに思っておりますし、私自身も、申し訳ないですが、災害のときには杷木・朝倉のコミュニティ会長と面識すらなかったことを記憶していますが、今では、やはり職員として親しくお話ができる関係ができたと思っております。

そういうふうな形で、また甘木の方も災害が大変だったということで、お見舞い金を出されたりとか、そういうようなことも実例としては記憶しておりますので、そういうふうな、かえって災い転じてというか、そういうようなことでもあったのかなと感じておるところでございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 今、梅田部長おっしゃられたことは、成功体験といいますか、困難を乗り越えて、それを共有したのかなと。そして乗り越えたねという形で、みんなで小さな成功といいますか、そういったものを喜んでいくような、そういったものなのかなというふうに思っております。

今、市長、手を挙げられましたので、もし市長がお考えになるビジョンとか、そういった共通の価値観とか、そういったもの、市長、どういうふうにお考えでしょうか。一体感を醸成するためには、やはりリーダーシップというのは必要です。リーダーが率先して一体感を大切にして、方向性を示す、そういうことによって、団体という組織というのは団結力を高めていくと思っております。市長がお考えになる価値観とかビジョン、こういったものは20周年を迎えるにあたってどういったものがございませうでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 市長。

○市長（林 裕二君） 今、総務部長がお答えしました災害からの復旧・復興と、それと防災ですね、こういったことに対しては、やはり市民の多くの人たちが関心も多いし、そしてまたそれをやってきた行政としては、ほかの行政機関との連携といったこともありますので、非常に、例えば福岡県の南部、国の国交省、そういったふうなのもかなりできてきたと。だから今回20周年を迎えるにあたって、これは今までの振り返りということも当然あります。一方では、こっちのほうが大事かなと、どちらかといえば思うんですけども、これから先、やっぱり朝倉市をどうやっていくかと。

そのどうやっていくかについて、今、議員が言われていますように、一体感という言葉で表現されておりますけれども、これはもう全部が一緒になってというのは非常に難しいと思います、地域の一体感を醸成。だけれども20周年という非常に大事な節目ですから、ある意味でチャンスになりますので、こういったことについて、その事業の内容等も今吟味しながらやっていますけれども、それをどういったふうに市民の皆さんたちと一緒に、理解を求めながら、そしてああそうだなと、あるいはそれをやったときに、やっぱり一緒にやったんだなというふうなふうに思ってくれる人たちが、できるだけ多くいていただければということかなというふうに思っておりますので。

非常に質問が難しいので、ちょっと答えが当たってないかなというふうに思いますけれども、とにかく一生懸命やっついていこうということで、いろいろ関係される方と一緒に、こちらから呼びかけながら、これがリーダーシップに当たるかどうかは別に分かりませんけ

れども、リーダーシップが結果的にこうだったから発揮されたと、いろんな見方がありますから、一概に言えないと思いますけれども、やっぱり行政の長ですから、少なくとも20周年の事業をいろいろやっていく中においては、やっぱり我々行政や職員と一緒に、20周年をしっかりと迎えようということ。それと今、御協力いただいております議会の皆さん方にも御理解を頂きながら、そして独自にそういった活動も生まれてきておりますし、していただいているという部分もございます。こういったことも考えておりますので、ぜひ議会の先生方には、よろしくお願ひしたいというふうに思います。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） もちろん過去の災害という悲しいこともありましたけれども、市長がおっしゃるように、これから前を向いていくというのも、そういった時期に朝倉は来ていると思います。そういった中で、市長が言ったように、コミュニケーションを市長が行政の長として、その要になってコミュニケーションを市民ととっていく。職員の皆さんがコミュニケーションをとっていく。これは絶対に必要なことだというふうに思っていますし、私は立派なリーダーシップに当たるというふうに思っておりますので、ぜひともお願ひしたいというふうに思っております。

次に、では市民と一緒に朝倉市を創っていく、将来の朝倉市のどうあるべきかということをお話し合う、そういったことは私必要だというふうに考えているんですが、私が時々感じていることが、市民が持っている行政に関する情報とか、知識量とかが少ないんじゃないかなというのを感じております。情報の不足から、市長や職員との対話がどうしても、非常に初歩的な話になって、行政の皆さんとかとのキャッチボールが成立しづらいのではないかと考えております。

これは、私、経済学部出身なものですから、情報の非対称性というんですけれども、片一方はたくさん情報を持っているけれども、片一方は全然情報を持っていないというようなの。よくあるのは、一昔前の生命保険の勧誘とかがそうなんですけれども、生命保険のこと何かよく分かんないけど、このおばちゃんが勧めるんだから悪い商品じゃないだろうと、そういうことで契約をするとか、そういったことがある。こういったのが情報の非対称性になるんですけれども、情報量が偏っているから、私はもっとこれを解消するために、積極的に情報を開示するべきだというふうに思っております。

職員の皆さんはパブリックサーバント、公僕だと思います。皆さんがお持ちの情報というのは、市民のもので、市役所のものでは、僕はないと思います。だから公開をしていくべきだというふうに思っているんですが、まず情報の公開というのはできていますでしょうか。私は徹底的な情報の公開が必要だというふうに思っておりますが、いかがでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） 情報の公開と申しますか、行政情報の提供ですね、そういう

ものも含めまして、説明をさせていただきます。まず市民の方が求めます行政情報、これにつきましては広報紙レベルの一般的なもの、また専門的になれば情報公開制度にのっとって請求していただくような情報の提供の仕方もあるかというふうに思っております。現在、インターネットの普及、使用率も高くなってきておりまして、ホームページの各課への問合せ一覧、こちらを御利用いただくとか、またメールでの意見要望、今後ますます増加していくのではないかと思っておりますし、今後導入を予定しておりますLINE、こちらについてはセグメント機能で、市民の方が欲しい分野の情報提供、嫌な情報が入ると拒否して、今後LINEの窓口を閉じられるという方もいらっしゃるのでは、欲しい情報だけを提供していくというようなこともできるように考えております。広報・広聴について様々な手法を合わせまして、今後も市民の方との情報共有に努めていきたいと考えております。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 情報の公開ですね、やはりオンライン上って情報量が莫大ですので、そういう形を取らざるを得ないのかなと思っておりますが、やはり市民と行政、要するに市役所の職員が同じ情報を持っていたほうがよりよい市政になるんじゃないかなと思うんですね。これ例がちょっと適当かどうかは分からないんですけども、やはり市民のほうもある程度力というか、そういったものを持っていかないと。

私なんかも一般質問するにあたって500人、今日いらっしゃる職員の皆さんと私議員1人としての情報量で、一般質問が成り立つんだろうかという絶望的な気持ちになるときも時々あるんですけども、でもそれを乗り越えようと思って、やはり一生懸命自分で情報を仕入れる、そういったことがやはり必要だと思うんですが、やはり市民の皆さんというのは情報が乏しいから、初歩的な質問になってしまうと。でも、先ほどこの例が適当かって言っていたのは、例えば市役所の皆さんの中には労働組合あると思うんですけども、労働組合があることによって、団体として交渉して、賃金をちゃんと獲得できるわけですよね。せめてこのくらいとかですね。これはすみません、市役所が適当かどうか分からないんですけども、処遇の改善であったりとか、そういったものが、交渉ができると思うんですね。

それで一般の会社でもそうなんですけども、やはり団体のほうがある程度の知識や力を持つということは、私は必要なことなのかなと。それで切磋琢磨しながら、組織全体が底上げしていくような、そういったことになるんじゃないかなと。もし労働組合とかがなかったら、会社から言われるままの給料を払って、会社から言われるまま働いて、そういった形になると思うので、やはり市民がある程度情報を持って、賢ければ、私は朝倉市はもっともっと強くなるのではないかなと思います。

それともう1つ、市民と行政って、持っている情報が仮に一緒になったとしても、やっぱり重視するポイントっていうのが違うと思うんですね。私よく議員になったとき、そ

れから選挙のたびに初心を忘れるなど、市民目線を忘れるなど、よく言われます。やはり知識が増えることによって、どうしても行政寄りの視点になってしまったりとか、そういうことが起こりがちです、私の中では。それをやっぱり戒めていきたいと思っていますので、そういった情報量の格差を解消していくことが、私は重要なんだとそういうふう思っております。

そういった中で、じゃあこれどういうふうに決まったんですかとかいった、その背景となる根拠とか、市役所があそこにできるようになったその根拠とか背景とか、今、市役所の例を出しましたが、そういった判断の根拠を説明するというのが、ちょっと弱いんじゃないかなと思っております。要するに、俗にいうアカウンタビリティ、説明責任がもっと朝倉市役所は必要ではないかなというふうに思っているんですが、どうでしょうか。

今、市長とのこんにちは市長室っていうことを言いましたが、説明責任を果たすために、今度は市職員の方が市民との対話をもっと促進すべきと私は考えますが、この点についていかがお考えになりますでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） 議員がおっしゃいます市民との対話っていうのは、業務外の分野でのことが強いのかなという感触で受けています。職員個々の業務のことであれば、それは当然に行わなければならないことですので、その外ということになりますと、やはり今市民の方が求められていることがどういうことなのかっていうのは、通常時のお付き合いからかなと思いますので、業務外でそれをさらに強めてくださいということが、今この場で頑張れと、職員にハツパをかけるということは、ちょっと答弁しかねるかなと思いますので、すみません。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） すみません。私、業務外もちろんなんですが、業務としても、もったこういうふうに決まりました、なぜならばとか、そういう根拠とか背景とか、そういうことをもっと市民にオープンに話すべきだと、説明責任を果たすべきだと、そういうふうに思っているんですが、いかがでしょうか。業務として説明責任をもっと果たしてくださいということです。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） その点については、果たしているとは思っております。ただ、いろいろ住民の方からちょっと憤りが感じられるというふうな話が伝わってくるころは、その方が思い悩んでいる真意、それを理解せずに事務的に処理をしてしまっていること、そういうケースが多いかなと思います。ですから、職員には聞く力、そちらを十分養ってもらいたいし、それに対して応える力を育てていかなければならないというふうには考えております。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 繰り返しになるんですが、私もそうなんですけれども、私も同じ立場です。行政と市民では、同じ情報でも解釈や重視するポイントが違うと思います。これを埋めていくこの溝をですね、それが議員である私の仕事でもあるし、職員の皆様の仕事だと思いますので、これを埋めていくことによって、私は朝倉市がもっと魅力のある町になっていくと思いますので、どうぞその部分は職員の皆さん、やっていただきますように、お願いいたします。

残り時間がもう30分になってしまいましたので、次に行きたいと思います。

今度は2番目の、1ページの、経済面では長きに渡ったコストカット経済から脱却し、デフレに後戻りせず、賃上げと投資が牽引する成長型経済に移行できるかどうか分岐点になりますという言葉が書いてあります。これは、副市長が先ほど言いましたように、国内の経済状況を書いたものだと思っているんですが、私も国内経済と同様に朝倉市もコストカット型、今からは成長型に移行することが必要だというふうに考えます。今までは災害の影響を受けて、非常にコストカット型だったと思うんですが、これから成長型になるべきだというふうに思っております。

ただ、いろいろな気になる経済の状況というのもあります。政治と経済は表裏一体です。必ず経済の影響というのは、政治は必ず受けます。私が気になっているのは、やはりインフレです。インフレが続くと、必ず政権が倒れたりとか、社会が流動化したりすることが、これは歴史の中で証明されています。今日、長期金利が1.5%をつけた、15年ぶりにつけたということで、長期金利が上がっていくということは、やはりこれからインフレが来るのかなと。でも振り返ってみると、私たち安心してお金を使えるような状況だろうか。サラリーマンの皆さんが安心してお金を使えるような状況にあるのかなと思います。後期高齢者の方々が安心してお金を使えるような、そういった今社会状況になっているのかなと、非常にどうなんだろうというふうに思っています。

インフレが来て、物の値段は上がっていく。だけど経済はパツとしない。ひょっとしたらこれってスタグフレーションという、経済は悪いのに物価だけが上がっていく、こういったのになるんじゃないかなというような心配も、私はしております。でも、これはどうなるかというのは、あとになってみないと分からないことですから、あとで判断すればいいということだと思います。その中で被災地だけではなく、朝倉市全体が発展期に、これからなっていくと思っています。これまでのコストカット型から成長に移行することが必要ですが、私は成長型にするためには歳入増が必要だと思っております。

コストカット、要するに成長していったら、利益と言ったら変ですけども、潤沢な予算を確保するためには、やはり収入を増やす。どんどん費用を削って増やすよりも、収入を増やすべきだと思っておりますが、こういった形で成長型にしていくのでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 企画振興部長。

○企画振興部長（三浦弘己君） 今後、成長型経済に発展していくためには、まず議員おっしゃるとおり、歳入増が必要ということでございますが、市の自助努力で達成できる手段としましては、自主財源の増だというふうに考えております。自主財源の中でも特に市民税や固定資産税、それからふるさと納税を増やす施策が重要であるということを考えているところでございます。

しかしながら人口減少が進む中、なかなかそういうところも難しいという状況ではございますが、地方自治体におけますコストカット型から成長型への移行といいますのは、財政運営や政策の重点を単なる支出削減というものから、地域の経済の成長や住民の生活向上を目指す方向へ転換することだということで、認識をしているところでございます。このことは、地方創生の取組とつながるといいうふうに考えているところでございます。

自主財源の増に向けた取組と併せまして、総合戦略に基づきます創業の支援でありますとか、新規就農者への定着の支援など、地元産業への支援、それから地域の観光資源を活用した観光客を呼び込む観光の振興、それから交流センターコンネアサクラを拠点としました、移住・定住の促進などの取組に今後力を入れるということで、地域経済が活性化をしまして、これにより新たな雇用の機会とか消費活動、そういったことが活性化することで、ひいては市民税とか固定資産税などの税収増につながるものと考えております。

税収増によりますさらなる投資が好循環を生み出して、持続可能な地域経済の発展に結びつく、限られた財源ではございますけれども、そのような成長型の経済を目指して努力してまいりたいと考えているところでございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 私もいろいろ私なりにどういったやり方がいいのかなと思っているんですが、私は朝倉市をやりようによっては、今、人口減少社会ですけども、チャンスはまだあるのかなと。その根拠といたしましては、この前新聞に福岡市のマンションの中古だったかな、マンションの平均価格が6,000万円で40%増になったと。もうとてもしゃないけど若い人は買えないと思います。そしたら、そういった市場原理で、やはり地価の安い朝倉市とかに来る可能性は私は十分あるのかなと思っています。交通機関もある程度発達しておりますし、インター3つある、鉄道2本通っている、チャンスはあると思います。それと、高速で帰ってくるとコストコができていて、鳥栖ジャンクションのところは、いっぱい倉庫みたいなのが建っていますので、やりようによってはああいう物流関係とかで建物を誘致して固定資産税を稼ぐ、こういうやり方というのは、私はチャンスとして方向性としてあるのではないかなというふうに思っております。

ただ、さっき言ったように、その一方でやはり歳入を増やさないと絶対駄目だと思うんです。空雑巾を幾ら絞っても限界があると思います。増やさないといけない。これはアニマルスピリッツで、やはり売上げを伸ばすというのはやっていけないと思うんですよね。そういった中で、その一方でスタグフレーションとかいうことも言いましたけ

ども、景気はどうなるか分からないというところもあります。

そういった中で、十文字公園の整備、それから市庁舎、それから甘木駅周辺の整備、それからサン・ポートの更新、こういったものがあります。そうすると、大型事業が立て続けにありますよね。私は大丈夫かなと。アニマルスピリッツを持ってというふうに言いましたけど、でもバランスって大事なんですよね。そこのところは少し心配に感じております。

私、銀行員の経験でいきますと、企業が潰れる一つの要因としては、大きな設備投資をしたときに、その設備投資をした分だけの費用が、効果が得られずに、要するにお金が足りなくなって倒産するというのはよくあるパターンです。過大な設備投資をすることによって、企業が倒産してしまうというのはよくあることですが、非常に設備投資に対しては慎重であるべきだという考えです、私は。

そういった中で、こういう大型事業が控える中、今度、財政の見通しを出してくださるということを書いていて、これは5年間のあれですけど、もっと長期的に見たら、よっぽど増収をしていかないと、またコストカット型の財政運営に戻るんじゃないかというふうに心配していますが、いかがでしょうか。お尋ねします。

○議長（小島清人君） 総務部長。

○総務部長（梅田 功君） 新しい事業を行うときには、やはり新たな財源を確保する、もしくはこれまでの事業を幾つか取りやめての財源の確保というようなことになるかと思えます。

財源を確保する手段としては、やはり地方自治体でありますので、国の施策、そちらのほうを注視しながら、経済対策などをしっかりと活用していきたいというようなことが一つあります。

また、自主財源、特に市民税、固定資産税、そしてふるさと納税を増やす、そういうふうな努力、そういうふうな施策の実現も重要でありまして、今後は事業に優先順位をしっかりとつけて取り組んでいかなければならないと思っております。

また、今からの大型事業、幾つか続きますが、その投資事業の実施が成長型経済の発展にも資するものであるというふうには考えておるところでございます。投資が好循環を生み、地域の経済成長や住民の生活向上を目指す方向へ発展していけるというふうに考えておるところでございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 私、その中でやはり基金のことをちょっと申し上げたいと思うんですが、基金、使えとかいう声もあるし、持っておかないといけないということもあって、これどれが正しいかというのは分からないと思います。やはり方針があるのみだというふうに思っているんですが、ただ気になっていましてのは、今まで日本は災害が多いです。地震があった、今度はゲリラ豪雨があった、今度は山火事まである。私、カリフォルニアの山火事とか見ましたけども、森林の面積が60%あるんですね。朝倉市でも温暖化によって

地表の土壌が乾いたら、山火事とか起きる可能性があるんじゃないかなと心配しております。ゲリラ豪雨も心配です。そしたら、ある程度の基金というのは残しておかないと、やはりこれからの気候変動が大きくなる時代に対応できないんじゃないかなと思っております。

そういった中で、副市長、私、財政の基金が、これから財政の基金を使わないと、5年ぐらいの財政の見通しではそんなことはないと思うんですけども、でも大型事業をしていて、いろいろ考えると、基金を取り崩していかないとやっていけないんじゃないかなと思っております。それなりに甘木駅周辺ににぎわいを創出する、雇用を生む、そういったものにはやはり投資が必要だと思うんですね。これ大事です。でも、費用対効果も考えないといけない。

そういった中で、基金を取り崩さないでやっていけるような、そういった財政運営って可能でしょうか。副市長、元職、財政畑ですのでお詳しいと思うので、あえて御指名させていただきます。いかがでしょうか。

○議長（小島清人君） 副市長。

○副市長（佐々木哲治君） 一つありますのは、財政調整基金が何とか今のところは40億円程度はキープできておるところです。これ従前からお話ししておりますように、平成24年災害をベースに、あの規模が2倍あったとしても耐え得るような形で30億円、それと本当の財政調整基金を10億円持っておきたいという考え方で、今40億円ということを示してまいりました。

ただし、やはりこれ財政調整基金ですので、今後いろんな需要によっては、いろんなことを考えていくべきだろうと思っておりますし、今回、先ほども先般、市長からもありましたように、500億円以上の災害復旧というのをやってまいりました。これが完璧であるかどうかは別にしても、平成24年当時よりもやはり災害には強くなっているんだろうという感覚は持っております。しかしながら、財政調整基金が幾らが適当なのかというのは、すみません、まだ答えを持ち合わせておりません。

現在、150億円から170億円の推移をしている全体の基金なんですけども、やはりこれは必要に応じて取り崩していく必要があると思いますし、できればあったほうがいいわけなんですけども、使う必要がなければためていくといった作業を繰り返しながら財政運営というのはやっていくべきなのかなと思っております。以上です。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 私も財政調整基金が幾らあったらいいのかというのは明確な答えは持っていないんですけども、しかし災害のことを考えると、今後を考えますと、まさかのためにある程度は持たざるを得ない、そういった時代に我々は生きているのではないかというふうに考えております。

誤解のないように申し上げますけれども、大型事業をやめろとかそういうつもりは決し

てございません。ただ、バランスの感覚ですね、これは大事です。特に、人口減少社会、これから私たちは急激な人口減少社会に向かっていきますので、今までの常識が通用しないような社会に入っていきます。私たちの子ども、私たちの孫は、そういう時代に生きていくんです。だから、そのことを考えて運用していくというのは我々の責任です。大人の責任です。ですから、そういった中で財政を厳しくチェックしていくというのは、議会人として私は責務だと思っておりますので、目を光らせていきたいと思っております。

そして、先ほどの情報の非対称性ではないですけれども、やはりそういった今回見通しを出していただきましたけれども、ある程度そういった見通しがないと、私たちも話しようがないといえますか、議論しようがないというふうに思いますので、ぜひともそういったものが定例的にして、作業が大変だと思います。この事業は入っていないのかとか、これはやるべきだとか、いろんな意見が出るとは思いますけれども、でも両輪としてやっていくべきだというふうに私は思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

次に、学校のLEDの整備についてを言わせていただきます。あと14分になっちゃいました。

5ページのほうに、学校施設等のLEDの整備をやっていきますということが書いてあるんですが、私は、特に学校の教室のLED化のことを話題にさせていただきたいと思っているんですが、幾つかの学校に行ってみますと、教室がちょっと暗いかなというふうに考えるんですが、この管理というのはどのようになっていますでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 教育部長。

○教育部長（隈部敏明君） 学校の教室の明るさということにつきましては、定期的にその明るさ、照度を測定しているわけではございませんで、学校からの報告によってその都度対処して、修理なり等を行っているといった状況でございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 今のお話だと、報告によってやっているということで、イメージ的には対症療法といえますか、申請があったらそれに対して対応するというような形なのかなと感じました。

そういった中で、まずその申請があったらということは、多分、主観でやっているのかなと。照度計で照度を測ったりとか、そういうことはしているのでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 教育部長。

○教育部長（隈部敏明君） 今も申し上げましたとおり、学校からの報告という形でやっております、その都度こちらのほうで照度で測っているといった状態ではございませんけれども、確認の際には照度計を使って測るといったこともやっております。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 私、感覚ではなくて、照度計で測るべきだというふうに感じてお

ります。それと、報告があったら対応するという事ですので、定期的にスケジュール化されていないような形になっていると思うんですが、私はスケジュール化して測るべきだと。要するに、スケジュールを組んで何月はどこ、何月はどこというような形でやっていくべきだというふうに考えますが、いかがでしょうか。

○議長（小島清人君） 教育部長。

○教育部長（隈部敏明君） 学校のLED化につきましては、現在のところ対症療法的なところもございませうけれども、学校施設等の大規模な改修等々をやる際には、LED化という形では対応してきておりますので、その辺は御理解いただきたいと思ひます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 教育部の予算というのは、10%ずつ毎年伸びていってございまして、非常にお金をかけていただきまして、積極的にやっただいていっていると思ひてございませう。あれもこれもはできないというのも私、重々承知してございませう。トイレのほうも前倒して対応していただきましたので、本当にありがとうございます。

けれども、やはり未来を担う、次代を担う子どもたちのために、学校の照明もこれはトイレが終わってからも結構ですので、やっただいていけないかなと思ひてございませう。これ照明が暗いからといって直接的な影響はないかもしれませうけれども、やっぱり暗いと学習効果の低下であったりとか、それから視力に負担がかかるとか、あとあるかどうか分からないですけれども、モチベーションが下がったりとか、そういったことがあるのかなと思ひてございませう。

ですから、そういったデメリットを発生させないためにも、定期的なスケジュール化をしていただきたいと思ひてございませうが、その前に学校、例えばどこどこ小学校は教室が幾つあつて、照明が幾つついているとか、ここら辺って管理されているんでしょうか、それとも学校長が把握しているものなんですか。教育委員会としては、そういった朝倉市全体の設備的なものは、数字といいますか、データをお持ちでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 教育部長。

○教育部長（隈部敏明君） 各学校の例えば照明が幾つあるとかという具体的な数値というのは持ち合わせてございませう。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） やはりデータといいますか、これからやっぱりもう世の中ってデータ主義になると思ひますので、データって大事だと思ひますよね。ですから、やっぱり教室が幾つあつて、その教室の中でLED化できている教室とできていない教室が幾つあるとか、そういった分というのは把握すべきではないかなと、そういうふうに考えます。そうしないとスケジュールも立てられませうし、そもそも政策も立てられないうんじやないかなと思ひてございませう。お忙しいとは思ひますけれども、私はそういうことは必要だと思ひますが、教育長いかがお考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 教育長。

○教育長（早野展生君） 今、議員が申されました学校の教室に入ったら暗いところもあると。実際、私もそういった学校を回ったときに、そういった教室がある場合もございます。この場合、私自身も主観でこの教室暗いとか、この体育館暗いとか、確かに暗い。ただ、測って見たらば300ルクスはあるとか、500ルクスはあるとか、そういった客観性はまだ持ち得ていませんので、今部長が申しましたけども、まずは現状を把握するというのを今後やっていきたい。

そして、さらに予算の範囲内でLED化を計画性を持ってやれたらいいなというふうに現在は考えているところでございます。以上でございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 照度計って、多分買ったら1万円ぐらいじゃないかな、もちろん高いものもあると思いますけど、それで暗い、明るいとかいうような主観ではなくて客観的に判断することが必要だと思いますので、ぜひとも準備ができるのであれば、予算が許すのであればしていただいて、やはりデータに基づくスケジューリング、これは絶対に必要なことだと思いますので、教育部局予算がいろいろ、立石小学校の改修であったりとか、いろんなお金がたくさんかかってきて、どんどんどんどん予算規模が膨れ上がっているのは分かっていますけれども、でも頭の隅に置いていただいてやっていただきたいというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

次に、十文字公園の整備についてを質問させていただきます。

十文字公園は、まずいろんな意見がありまして、総合体育館については白紙になるということだったんですが、いろんな考え方があって、総合体育館ありきの十文字公園だったから、公園自体をやめてまたゼロから考えるべきだというような考え方も私できると思うんですね。

ただ、交付金をもらうようになっています。こういった中で、交付金を受けるということが決まっているのに、これを白紙に戻すということは、現実的には可能なんでしょうか、またどういったデメリットがあるんでしょうか。私がそういった申請をして取り下げますとか言ったら、朝倉市さん、何考えているんですかというような話になるんじゃないかなというのも危惧しているんですが、ここのところは実際どうなんでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 都市建設部長。

○都市建設部長（井上政司君） 今現在、国のほうと交付金事業を計画しておりますけども、これにつきましては、今回白紙にいたしました総合的体育館、これについては含んでおりません。それについてはまた別枠として体育館を建設するというふうな判断が出た時点で計画をするというようなところで進んでおりました。以上でございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） すみません、私、今よく理解できなかったんですけども、体育館は含んでいないけれども、公園は白紙にできないってということですかね。再度お尋ねします。

○議長（小島清人君） 都市建設部長。

○都市建設部長（井上政司君） 公園整備につきましては、令和7年度から5年間の事業ということで、国のほうの認可を取っておりまして、それをやめるということになると、もしまた再度公園整備事業をやっていこうといったときに、やはり国の交付金としての採択に影響が出てくるというふうに思っております。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） 当初の計画からもう18年たちまして、公園事業が動き出そうかとしております。そういった中で、ここで白紙に戻すというのは、私も現実的に感覚としては難しいのかなというふうに考えております。

そういった中で、あそこに公園ができて、調整池のところがアーバンスポーツのメッカになったらいいなというふうに思っているんですが、今度福岡競艇場にできますよね、それと同じようなものができるんでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 都市建設部長。

○都市建設部長（井上政司君） スケートパークにつきましては、議員おっしゃいましたように調整池の有効活用ということで計画をしております。これにつきましては調整池を整備しまして、その効果がきちんと発揮されるということをまず確認することが必要だと思っております。そういった中で、そういった確認ができた後に整備をやっていこうというふうに考えておりますけれども、これにつきましてはスケートパークの協会と申しますか、そういった利用されている方々の意見を聞いた上での施設整備ができたというふうに思っているところでございます。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） スケートパークですかね、スケートボードのパークは、やはりアーバンスポーツというのは若者がやることですので、SNSなんか若者の発信をしてもらってですね、朝倉市の宣伝になるんじゃないかなと私は期待をしております。田舎なのにアーバンスポーツが朝倉市でできるとなると、結構話題性が出るんじゃないかなと私は期待しております。

そして、公園を造るのであれば維持費もそれなりにかかると思っておりますけれども、維持費をなるべく抑えていただきまして、費用対効果のあるような公園を造っていただきたいと思っております。私、公園ができれば、あそこの十文字地区っていうのは非常にいい住宅地街になるんじゃないかなと。若い人たちが公園のそばということで、新しい家がたくさん建つんじゃないかなということを考えております。そういった十文字地区の方々の交流の場とかであったりとか、それから若い人たちが新しい家を建てたりして、不動産価値が

上がったりするんじゃないかということを考えておりますが、そのところを担当課としていかがお考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（小島清人君） 都市建設部長。

○都市建設部長（井上政司君） 公園ができることでどういった影響があるのかなということで、いろいろインターネットとか見ていたときに、マイホームの場所を決めるのにやはりどういったものがあつたらいいのかというアンケート調査の中で、スポーツ公園、公園というのが圧倒的に多かったという記事を読んだこともあります。また、その地域が子育てしやすいと感じた理由としては、やはり公園や遊び場が多いというのが圧倒的に多かったというふうな、こういった記事もございましたので、今回の十文字公園を整備することによりまして、そういった若い世代の方、それから地域の方も大いにそこを活用していただけるような、そういった公園になったらというふうに思っております。

○議長（小島清人君） 12番中島議員。

○12番（中島秀樹君） これはもう先ほども言いましたように、当初から18年もたっておりますので、サグラダ・ファミリアじゃないですけども、早くやっぱり完成させたいというふうに思っておりますので、地域の活性化に結びつくような施設にしていきたいと思えます。

時間が参りました。これで私の質問を終わります。

○議長（小島清人君） 12番中島秀樹議員の質問は終わりました。

暫時休憩いたします。午後1時に再開いたします。

午後零時零分休憩